

インターハイ

2020.4.28

今年の8月に実施されるはずであった全国高等学校総合体育大会（略称「高校総体」）いわゆるインターハイ（インハイ）がなくなってしまった。覚悟はしていたとはいえ衝撃である。

3月には春の選抜高校野球大会がなくなった。野球の注目度が高いため、大々的に報道されたが、他の競技の全国選抜大会（春の選抜大会）も軒並み中止となっている。3月の時点では、夏の甲子園、夏のインターハイを目指して、気持ちを切り替えようとする高校生が多かったことと思う。

それが、5月の県北地区高校体育大会と5・6月の県高校体育大会が中止となり、運動部での活動を青春の1ページとして飾るはずであった高校生たち、特に3年生は途方に暮れたことと思う。県北大会も県大会もインターハイの予選である。目指すべき最後の活躍の舞台がインターハイなのである。野球で言えば、甲子園である。サッカーやバスケットボール、バレーボールなどの競技には冬の全国大会もあるが、多くの競技は夏が本番である。

最後の活躍の舞台がなくなり、その予選もなくなってしまった。県代表となり、東北大会、全国大会での活躍を目標にしてきた選手も大勢いたであろう。3年生にとっては、県北大会、県大会、東北大会そして全国大会のどれもが、それぞれの選手にとっての最後の舞台となる。勝つことは大切だが、3年生にとっての“終わり方”が重要である。はじめをつける場が必要である。

大切な舞台、場がなくなってしまった。どのようにして気持ちに整理をつければいいのか。指導者の皆さんの心はいかばかりであろうか。インターハイも甲子園も、高校生にとっての目標であり憧れの場である。この存在は大きい。高校時代にスポーツをやっている以上は、インターハイや甲子園には出てみたいと思うのが当然である。

スポーツをやっていると、伸びる時期というものがある。高校2年生の冬から3年生の夏にかけて伸びていく選手がいる。夏の大会というものは、その伸びを証明する場でもあった。高校2年生の秋の結果とは、また違った展開になることが多いのが夏である。

今年のインターハイは、東京オリンピック・パラリンピックの開催時期を考慮して、例年よりも遅い時期の開催予定となっていた。8月になれば、今の状況も落ち着くのではと考えていた方も多いことと思う。ただ、予選は5月から始まる。一時期は、予選を遅らせるという選択肢もあったかもしれない。しかし、現状では難しい。

私は、県北地区高体連バドミントン競技の部会長となっている。バドミントンは「3密」を避けるのが難しい競技である。体育館を閉め切って行う。加えて県北地区は登録選手数も多い。高校生に人気のある競技である。万一に備えて大会を実施する方策を練っていたが、水泡に帰した。

大会はなくなってしまったが、現在では3年生が気持ちの整理をつける場、はじめをつける場を設けることができないか模索をしている。このまま一つも大会が行われないうまま終わってしまうのはあまりにも忍びない。

苦渋の決断とは今回のことを言う。まさしく断腸の思いである。それだけ、世界規模の混乱の状況の深刻さは、まさに危機的状況と言えるものなのである。そのことを理解し、高校生の皆さんには、部活動を通して学んだことを今こそ生かしてほしい。そう切に願う。